

A-1 研究の内容

授業改善の柱

- 生徒にとって「わかりやすい」授業の展開
- 生徒の学習に対する主体性を高める手立て

(1) 学習の見通し・ねらいの明確化

本校では昨年度より「学び方ハンドブック」(シラバス)を生徒に配布し、各教科の目標や身に付けてほしい力、授業の流れや学習ポイント、評価の観点・方法などを生徒に示している。

教科書の変更に伴い今年度はまだ1学期版しかできていないが、本単元でも教材ごとの「学び方ハンドブック」を生徒に提示した。その中で重点化したのが、生徒に学習の見通し(学習計画)と授業のねらい(毎時の目標)を持たせることである。

学習の見通し・ねらいを明示することで、生徒自身が限られた時間の中で自分のすべきことや授業の流れを理解することができる上、到達目標がわかるため、生徒達が主体的に授業に取り組むことができると考えた。また、教師の願う生徒の姿と生徒自身が目指す姿とが一致し、教師の指導すべきことと生徒の頑張り所が明確になると考えた。さらに、「この時間で何を身に付けたか。」という自分の学んだ力を振り返ったり自覚したりする観点も明らかになると思われる。

(2) 生徒の実態に基づく単元の設定

生徒は5月に、「事実と考察を見分ける」というねらいのもと、説明的な文章の教材「文化を伝えるチンパンジー」を学習している。その際生徒達は、真面目に取り組むが関心が高いとは言えない様子であった。学習後の自己評価では、「説明的な文章が好き」な生徒は約1割、「嫌い」な生徒も1割強で、ほとんどが「どちらでもない」という状況であり、学習が受け身になる原因の一つが見えたような気がした。説明的な文章を学習することでどんな力がつくのかを意識させ、「わかる」実感を持つことができればより学習への関心も高まるのではないかと思われる。

本校の生徒達は、本来学習に対し意欲的で、授業や課題に前向きに取り組む生徒達である。今回実践した単元「根拠を明らかに」(光村2年 第5単元「事実と意見」)は、教科書では11月に位置づけられている教材であるが、1学期の実践として設定した。その理由としては、

- ① 5月6月と一連の流れで説明的な文章を学習することによって、前教材での学びを生かし、文章の構成、論理の展開のしかたをしっかりとらえさせることができるのではないか、
 - ② 説明的な文章で読んだ文章構成を生かした意見文を書くことで、「学んだこと」が「生きる」実感をもたせることができるのではないか、
- と考えたことにある。説明的な文章を学ぶ意義を実感させ、生徒の学習に向かう意識の変容を願っての単元の設定である。

(3) 主体的な学習場面の設定

①相互評価、自己評価

授業では、活動の前に評価の観点をはっきりさせることで課題意識を持って取り組むことができるようにしてきた。自己の学習を振り返り、学びの確認をするとともに、こうなりたいという思いから次への意欲につなげていきたいと考える。

②ワークシートの工夫

「読むこと」の学習において、文章構成をとらえながら根拠を読むためのワークシートを準備した。近年の生徒達のノートを見ると、自分の間違った所は消して書き直したり、教師の板書や正しい答えのみを写したり、きれいに仕上げたいという気持ちが強い。そこで、ワークシートに「自分の力」で考えたことを書くスペースを設けた。間違っているとしてもそれは自分の学びの軌跡であることを話し、思い切って書いてみるよう指示した。正しい答えを書くスペースが残されているので、生徒達は間違いを恐れず、それぞれ自分の力で課題に挑戦することができる。また、自分の考えを持つことにより、課題意識が生まれることや、修正した箇所が確認できることは、生徒の主体的な学習につながるのではないかと考える。

③限定した条件に応じた言語活動

- ・文章の構成 学んだ説明的な文章の構成をもとに意見文を書かせた。
- ・字数の制限 600～800字の分量
- ・相互評価における時間の条件

互いの意見文を読み相互評価する場面で、一つの意見文を評価する時間を約6分と設定した。6分という時間は、600～800字という分量の字数を読むのに1分半～2分かかると考え設定した。

限られた条件の中での活動を設定することで、生徒達は意欲的、かつ、よく集中して取り組むと考えられる。

④ねらいに即した環境の設定

目的別グループの中で相互評価を行ったが、グループとして机を合わせたりはせず一人一人が自分の机で正面を向く形態で行った。評価をするのは個人の作業なので一人の方が集中して取り組める。

(4) 書く力をつけるための手順を踏んだ指導

生徒達は作文を書くことに対し苦手意識を持っている。その原因の一つに、書き方がわからないことが挙げられる。抵抗感を取り去るために以下の手順を踏んだ。

- ①説明的な文章を「読む」学習において、文章の構成、論理の展開、根拠の提示の仕方を確認させるとともに、説得するためには根拠が必要なことを理解させる。
- ②身の回りから意見文の題材を見つけさせる。
- ③自分の立場、根拠、予想される反論、それに対する意見を考え、構想メモを作らせる。
- ④構成メモを吟味し、作文に必要な事柄を取りあげ構成を考えさせる。
- ⑤構成をもとに作文させる。
- ⑥自分の書いたものを推敲させる。
- ⑦表現の意図や効果についての観点を持たせ、相互評価や自己評価をさせる。

(5) 生徒の変容を願って

本単元の「読むこと」の学習後に行った自己評価を見ると、「説明的な文章が前より好きになった」と答えた生徒が4割以上おり、「嫌い」と答えた生徒は1割程度であった。前より好きになった理由としては、説明的な文の構成を理解できたことが主なものである。また、意見文を書いた後の自己評価を見ると、「書く力がアップした」と答えた生徒が8割以上いた。これらは自己評価の結果であるが、「わかった」、「できた」、「精一杯取り組んだ」という達成感や満足感が大きくなったことは間違いない。課題の明確化、段階を踏んだ学習、ポイントを明らかにした評価の視点から、生徒は「学び」を実感できた。

さらに、5月のアンケートと同じものを本単元終了後にとってみたが、「国語が好きだ」という問いについて肯定的に答えた生徒が10%増え、「国語の授業がわかる」という問いについて肯定的に答えた生徒が21%増えた。また、「学び方ハンドブックの利用」についても「毎時目標を確認している」と答えた生徒が3割になった。

本単元の授業をする中で生徒達は、より意欲的に、主体的に授業に取り組むようになってきたと言える。何より、授業に臨む目の輝きが違ってきた。